

会津短期大学研究年報第49号 pp. 119～131 (1992)

住宅のインテリアカラーコーディネーションについて

牧 田 和 久

1. はじめに

情報化社会での住宅をとりまく情報は様々なかたちで供給されている。中でも実体験が可能な住宅展示場はプラン・仕上材・設備・家具・什器などの個々の製品情報を実物で提供するほか、実空間として提供することから製品間のコーディネート情報も提供しているといえる。また、空間としてのスケール感、色彩感、質感、雰囲気などの室内環境も体感させてくれる。住宅を建設する建築主にとって最も有効な手段として住宅展示場を位置づけることができる。さらに、住宅展示場は低質な住宅供給や一般建築主に対し、工法や設備の選択、様々な製品のコーディネートなどを通して住宅環境の質の向上や普及・啓蒙など努力する立場にあるといえる。一方、住宅のカラーコーディネートは住まい方や室内環境に対する要求により仕上材料や家具・什器にいたるまで色彩に多様化と変化をもたらしている。ここでは、住宅環境や雰囲気の設計に重要な影響を与えるインテリアの色彩を対象にして近年のカラーコーディネートがどのような構成になっているかを、住宅展示場を中心に様々な要素から比較検討を試みながら住宅のカラーコーディネーションの実態を把握することを目的としている。

2. 方 法

インテリアの色彩の使われ方の実態を把握するために、室内の床・壁・天井の各部位の色彩を色彩差計（ミノルタ CR-200）にて測色した。測色した戸数は一般住宅20戸、住宅展示場44戸の計64戸で、地域別では福島県内28戸、愛知県内19戸、大阪府内10戸、岡山県内7戸であった。また、測色の対象とした空間は玄関・廊下・居間・台所・寝室・和室・浴室・洗面室・便所・子供室とした。測色値は色相、明度、彩度のマンセル記号にて整理する他に(財)日本色彩研究所の調査用カラーコード

ドを用いて16の基本色名による大分類（色相圏別分類）、14のトーンによる中別分類を採用して整理した。さらに、床・壁・天井の配色パターンを明度差・彩度差により図-1のような9分類に設定し、色相およびトーンの床・壁・天井の配色パターンを図-2のような5分類に設定した。また、インテリアの配

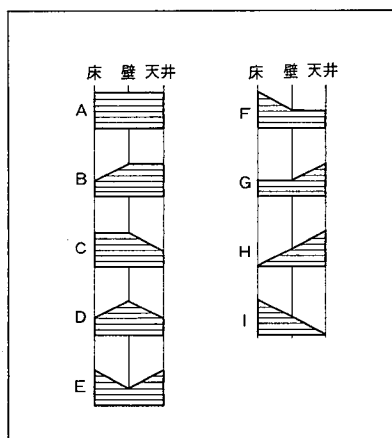


図-1 明度差・彩度差のパターン

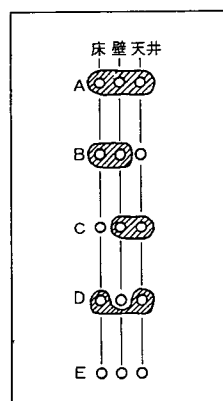


図-2 色相・トーンの配色パターン

色の設計者を施主、設計事務所、インテリアコーディネーター（IC）、工務店、ハウスメーカー営業、ハウスメーカー設計の6分類などにより整理した。なお、明度差・彩度差のパターンは各部位間の差が1.0未満のものを各々同一明度、同一彩度とし、1.0以上の差のあるものは違うものとして処理した。以上のような資料から、色相による色の出現状況、トーンによる色の出現状況、色相圏およびトーンからみた床・壁・天井の配色のパターンなどの実態を明らかにするとともに、空間別、地域別、設計者別、用途別（一般住宅、展示場住宅）などからも検討を行った。

3. 結果および考察

1) マンセル値による出現状況

マンセル値からみる色相では床・壁・天井ともYが最も多く出現し、床で52.8%、壁で83.8%、天井で76.8%、全体では71.1%となりYの占める割合が高く、Yに集中しているといえる。ついで各部位ともYRが多く、その両方で9割以上を占める結果となった。明度の分布は図-3のようになり、部位別に平均を求めると床5.8、壁7.9、天井8.0となる。また、彩度の分布は図-4のようになる。部位別にみる平均は床2.3、壁1.5、天井1.6となった。色相がY、YRに集中していることから、住宅の色相はほぼY、YRで構成されているというこれまでの研究結果と変化がない。壁・天井の明度、彩度は同じ傾向を示し、明度は8前後で彩度は2弱程度が最も多く使われている。床は壁・天井に比較して明度が低く彩度がやや高いといえる。これらは、壁・天井に同様の仕上材を使用し、白色系を基調色としたものが多く使われていることに起因する。また、壁・天井の明度・彩度とも一部に集中しているのに対し、床はやや広い範囲に分布され、床材の仕様が多くの色彩で利用されていることがわかる。

2) 色相圏による色の出現状況

調査用カラーコードを用いて16の基本色名による分類を行い、色相を圏別に整理すると図-5のようになる。床ではグレイ圏が40.6%と最も多く、ついでブラウン圏（37.3%）、黄色圏（11.3%）の順となる。壁・天井では白圏がそれぞれ52.1%、55.9%、グレイ圏が23.5%、23.0%となり、この両方で75%以上が占められる。次に多いものとして、壁では黄色圏（10.1%）が、天井ではブラウン圏（14.0%）となる。1)のマンセル値にみる色相の出現状況からも予測できることだが、住宅の色相は主に白圏、グレイ圏、ブラウン圏、黄色圏などで構成されているといえ、床はブラウン圏、壁・天井は白圏が最も多く用いられているといえる。また、これまでの研究結果と比較すると、住宅全体では白圏・グレイ圏が増加し、黄色圏が減少したといえ、住宅の色相がニュートラル化してきているといえる。

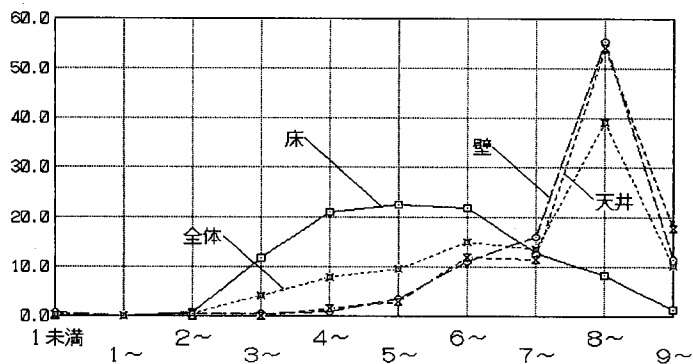


図-3 マンセル値の明度にみる出現状況 (%)

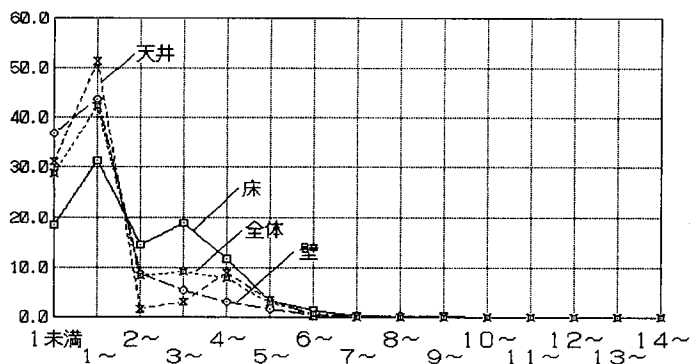


図-4 マンセル値の彩度にみる出現状況 (%)

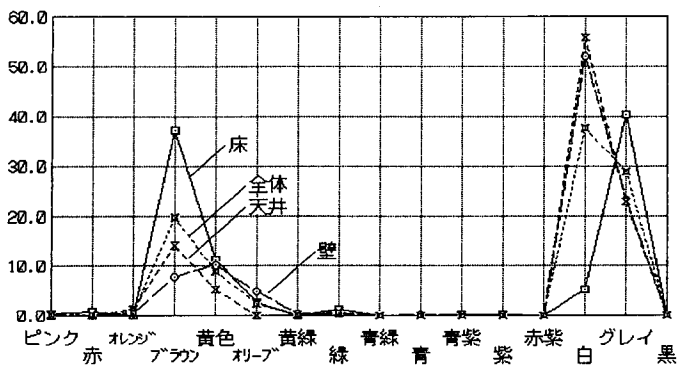


図-5 色相圏による色の出現状況 (%)

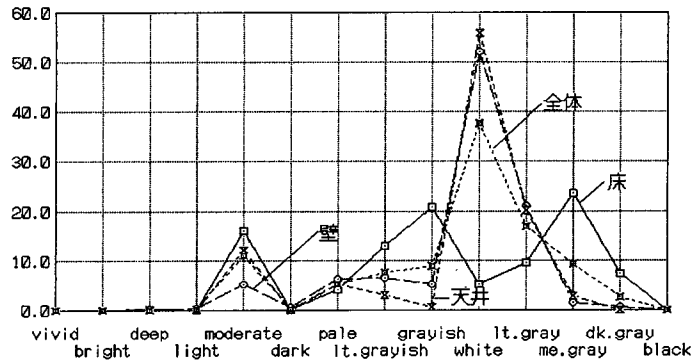


図-6 トーンによる色の出現状況 (%)

3) トーンによる色の出現状況

トーン別による出現状況を整理すると図-6のようになる。床ではgrayの23.7%が最も多く、grayishが20.7%、moderateが16.0%、light grayishが12.9%の順で、壁・天井ではwhiteがそれぞれ52.1%、55.9%、light grayishが21.1%、20.2%となっている。トーンは明度と彩度との関係なので1)の明度と彩度の出現状況の関係からも推測できるように、壁および天井は彩度の低い白 (white) や明るい灰みの (light grayish) などのトーンが多く用いられ、その両方で70%以上が占められている。反面、彩度の高いvivid、bright、deepなどのトーンでの出現がきわめて低い。一方、床はにぶい (moderate)、明るい灰みの (light grayish) から暗い灰み (grayish、dark grayish) のなどの形容詞で表現されるトーンが多く用いられており、壁・天井よりややvividよりである。全体としては無彩色化の傾向にあるといえてよい。

4) 明度差パターンによる配色

壁・天井が同一明度で床の明度が壁・天井よりも低いBタイプ (表-1) が最も多いパターンとなり60.8%であった。ついで床・壁・天井が同一明度のAタイプの17.4%となり、その他の明度差パターンの出現にはあまり高いものがなかった。A、Bの両タイプで約80%の明度差パターンが出現する結果となり、AまたはBタイプが多いことから壁・天井の明度が同じ状態で床が同じ明度かやや低い明度の配色パターンが明度差による配色の一般的な例といえる。Bタイプが突出して多いことから明度差パターンの代表的なパターンといえる。A、Bタイプとも壁の明度は8前後でBタイプの床の明度は平均で壁・天井より3程度低いものであった。Bタイプが多いのは床の明度を下げることにより落ちついた雰囲気確保すること、つまり、空間の安定性の確保のためと思われる。

表－１ 明度差パターンによる配色と明度の関係 表－２ 彩度差パターンによる配色と彩度の関係

明度差パターン	出現 (%)	明度差 (床・壁)	明度差 (天井・壁)	明度差 (天井・床)
A	74(17.4)	-0.1	7.7	0.0
B	259(60.8)	-3.2	8.4	0.0
C	8(1.4)	-0.1	8.7	-1.7
D	27(6.3)	-3.1	8.6	-2.4
E	15(3.5)	2.4	4.1	3.9
F	10(2.3)	1.4	5.7	0.4
G	9(2.1)	-0.1	6.0	2.4
H	26(6.1)	-2.6	7.0	1.7
I	0(0.0)	-	-	-

彩度差パターン	出現 (%)	彩度差 (床・壁)	彩度差 (天井・壁)	彩度差 (天井・床)
A	166(39.0)	0.1	1.1	0.1
B	12(2.8)	-1.3	1.9	-0.3
C	8(1.9)	-0.4	2.6	-1.8
D	27(6.3)	-3.0	4.4	-3.0
E	39(9.2)	2.3	1.7	2.2
F	143(33.6)	2.5	1.0	0.1
G	24(5.6)	0.1	2.2	2.3
H	4(0.9)	-1.5	2.0	2.9
I	3(0.7)	1.2	3.3	-2.2

表－３ 色相圏の配色パターン

パターン	出現数 (%)
1	44(10.3)
2	48(11.3)
3	194(45.5)
4	0(0.0)
5	140(32.9)

表－４ トーンの配色パターン

パターン	出現数 (%)
1	44(10.3)
2	48(11.3)
3	194(45.5)
4	0(0.0)
5	140(32.9)

5) 彩度差パターンによる配色

床・壁・天井の彩度に差がないAタイプ（表－２）が39.0%、壁・天井が同一彩度で床がそれよりも高い彩度のFタイプが33.6%の順となっている。A、Fタイプで約75%が占められるが、彩度差パターンはAまたはFタイプに2分されているといえる。両者とも壁の彩度は1ぐらいい、平均値にみる彩度の差の値はFタイプの床は壁に比べて彩度が2.5程度高くなっている。壁・天井は無彩色で床は無彩色またはやや有彩色よりの彩度が多用されているといえる。

6) 色相圏による配色パターン

色相圏による配色パターンを表－３に示すと、壁・天井を同一の色相で床が他の色相で配色するパターン3が最も多く45.5%、ついで床・壁・天井がそれぞれ違う色相で配色するパターン5が32.9%であった。この両者で約80%を占めることから色相の配色パターンの代表例といえる。パターン3の具体的配色では床・壁・天井がそれぞれブラウン圏・白圏・白圏が36.6%、グレイ圏・白圏・白圏が35.1%、ブラウン圏・グレイ圏・グレイ圏が10.3%の順で、パターン5ではグレイ圏・白圏・グレイ圏が9.3%、ブラウン圏・グレイ圏・白圏が8.6%、ブラウン圏・白圏・グレイ圏、黄色圏・オリーブ圏・ブラウン圏がそれぞれ7.1%であった。色相の部位別傾向からも予測できることであるが、床にブラウン圏・グレイ圏、壁・天井に白圏・グレイ圏からなる組み

合わせが多用されている。また、床と天井が同じ色相で壁が違う色相で組み合わせる配色パターンの出現がみられなかった。

7) トーンによる配色パターン

トーンによる配色パターンの出現を表-4に示す。壁・天井が同一のトーンで床が他のトーンと配色するパターン3が49.1%と最も多く、床・壁・天井がそれぞれ違うトーンで配色するパターン5が39.7%であった。両者で約90%を占める結果となり、トーンの配色パターンはこの両者で構成されているといつてよい。また、色相の配色パターンと同様に、床と天井が同じトーンで壁が他のトーンで配色されるパターンはやはり見られなかった。具体的な配色パターンとして、パターン3では床・壁・天井がそれぞれ grayish・white・whiteの配色が最も多く20.6%ある。ついで、medium gray・white・whiteが15.8%、light grayish・white・whiteが12.9%であった。パターン5ではmedium gray・light grayish・whiteが最も多いものの8.3%と低い。全体としては、床ではmedium gray・moderate・light grayishなどと、壁・天井のwhite・light grayなどの配色が多くみられる。

8) 空間別にみた特性

マンセル値にみる色相は全般的にYが最も多いが、居間・台所・子供室の床においてはYRが最も多く出現しており、和室の天井でもYRが最も多く出現している。また、色相圏では床はグレイ圏で、壁・天井は白圏が全般的に多いが、マンセル値の色相と同様に床のブラウン圏の出現が廊下・居間・台所・子供室などに多くみられる。これらは他の部屋に比べて木質系床材が多く用いられていることによる影響と考えられる。床の明度では5前後が多く出現するが、浴室・洗面室・便所では8.0~8.9が最も多く出現している。壁・天井では8.0~8.9が全般的に最も多く出現したが、和室では6.0~6.9が最も多く出現した。図-7の明度差による配色パターンでは和室が床・壁・天井の明度が同じAタイプ、他の空間は壁・天井が同じ明度で床が低いBタイプが最も多く出現。図-8の彩度差による配色パターンでは居間・台所・子供室が壁・天井が同じ彩度で床が高いFタイプ、和室が床・天井よりも壁の彩度が低いEタイプ、他の空間では床・壁・天井の彩度が同じAタイプが最も多かった。色相およびトーンの配色では各空間とも約50%以上が壁・天井が同じ色相またはトーンで床が違うパターン3であるが、和室では約70%が床・壁・天井の違うパターン5である。以上のことから、和室の色彩的特徴は別にしても、似た傾向にある空間をグループ化すると居間・台所・子供室のグループと浴室・洗面室・便所のグループそして他の空間のグループに大別できそうである。

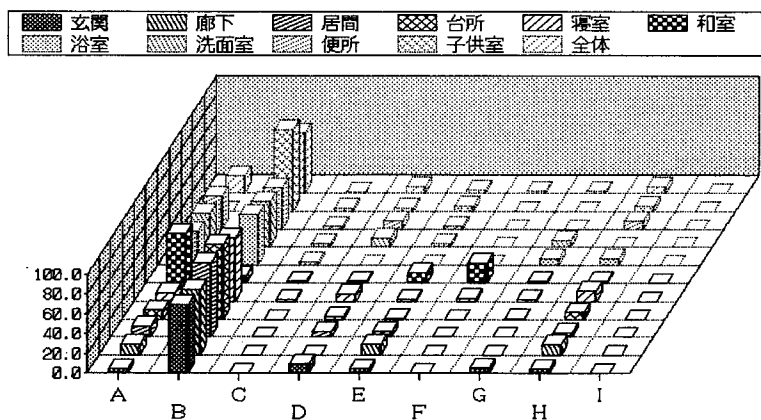


図-7 空間別にみる明度差パターンの出現 (%)

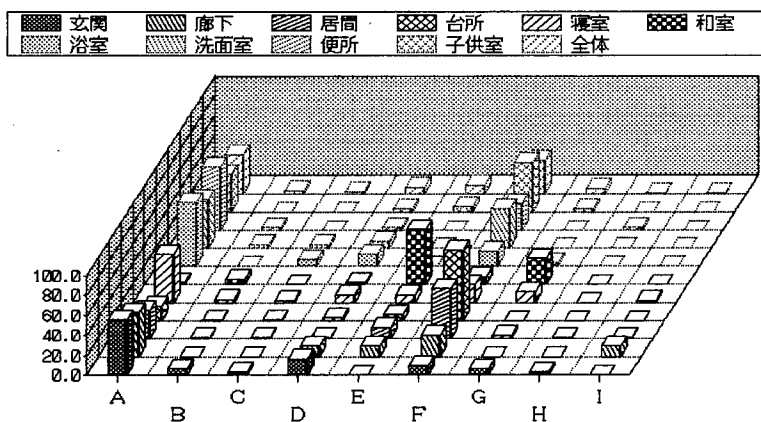


図-8 空間別にみる彩度差パターンの出現 (%)

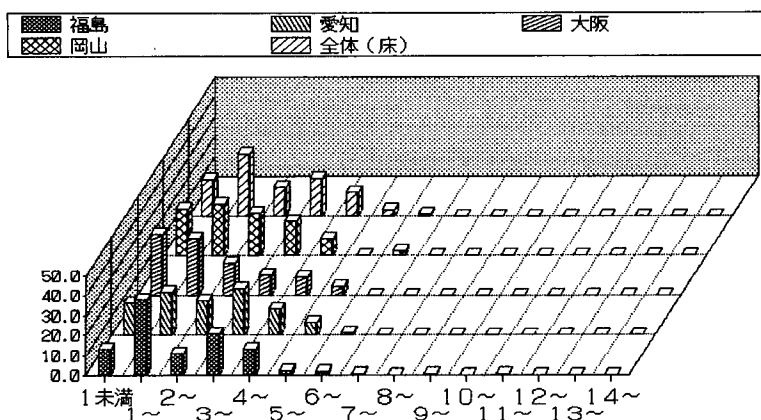


図-9 地域別にみる彩度(床)の出現状況 (%)

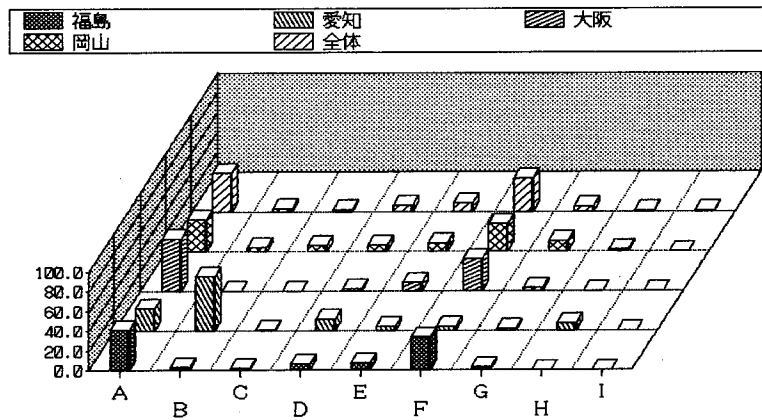


図-10 地域別にみる彩度差パターンの出現 (%)

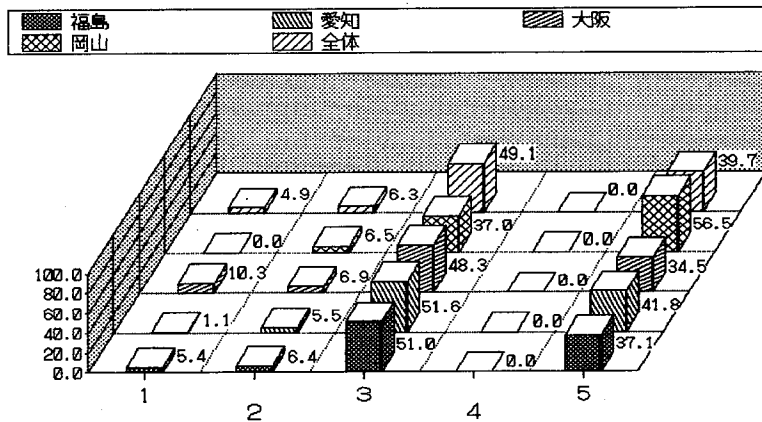


図-11 地域別にみたトーンの配色パターン (%)

9) 地域別にみた特性

地域を福島（202室）、愛知（91室）、大阪（87室）、岡山（46室）に整理してみると、壁・天井では大きな差が認められないが、図-9にみられるように床の彩度の出現状況では福島・愛知に比べて大阪・岡山に1未満の出現が多い。床の色相圏で愛知のブラウン圏、大阪の白圏が他に比べやや多い。図-10の彩度差による配色パターンの出現では愛知にややばらつきがある。図-11のトーンの配色パターンでは3のパターンが最も多いが、岡山は5のパターンが最も多いことがわかる。サンプル数が少ないこともあるが、決定的に際だった特徴がみられないものの、大阪・岡山は色相、彩度にややニュートラル化が進んでいるとみられる。

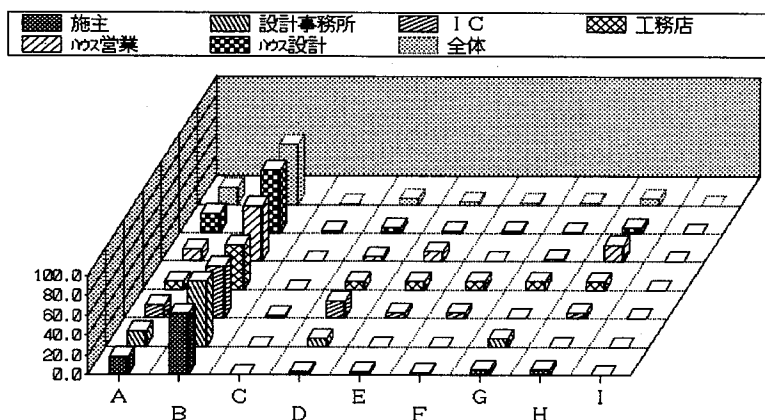


図-12 設計者別にみる明度差パターン (%)

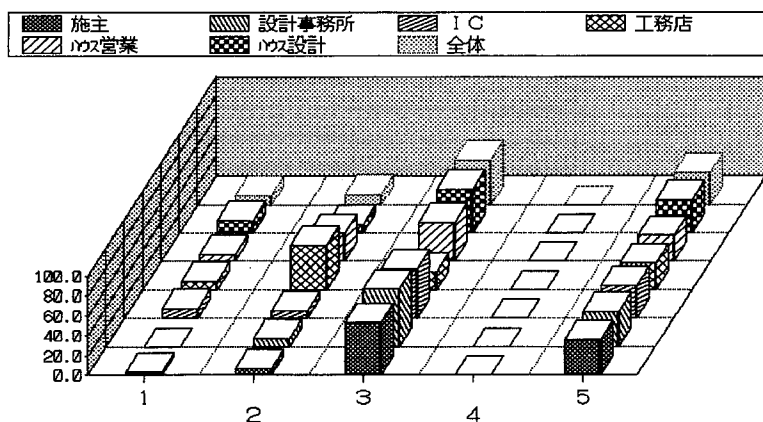


図-13 設計者別にみる色相圏の配色パターン (%)

10) 配色の設計者別にみた特性

配色の設計者をつぎのように分類すると世帯主（サンプル数58室）・設計事務所（12）・インテリアコーディネーター（40）・工務店（11）・ハウスメーカー営業（43）・ハウスメーカー設計（262）になり、ハウスメーカーの設計担当者が最も多い結果となる。設計者別に比較してみると、やや差がみられたものに施主の床の彩度およびトーンの出現にばらつきが多い。また、図-12のような設計者別にみた明度差による配色パターン、図-13のような色相圏の配色パターン、図-14のようなトーンの配色パターンなどから工務店・ハウスメーカー営業が他と違う傾向をみせている。部分的にサンプル数が少ないものがあるので具体的に考察するにはいたらないが、施主を除いて、工務店およびハウスメーカー営業マンと他の設計者には幾分の違いがあるようである。

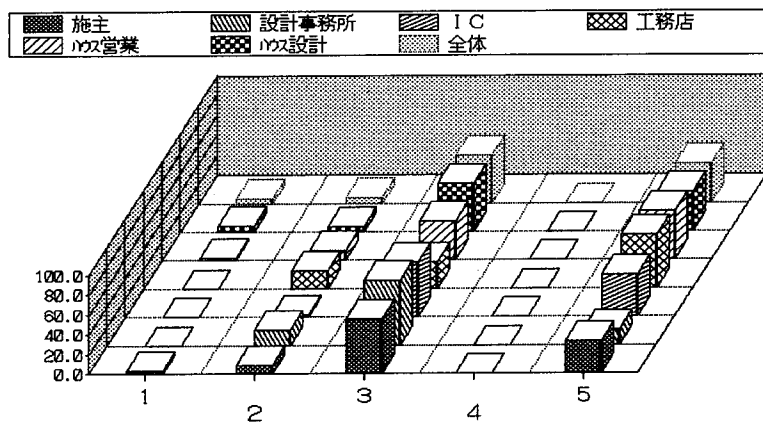


図-14 設計者別にみるトーンパターン (%)

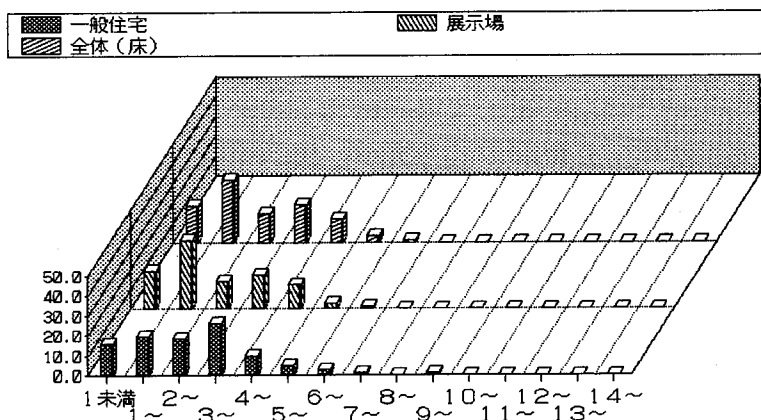


図-15 用途別にみる彩度(床)の出現状況 (%)

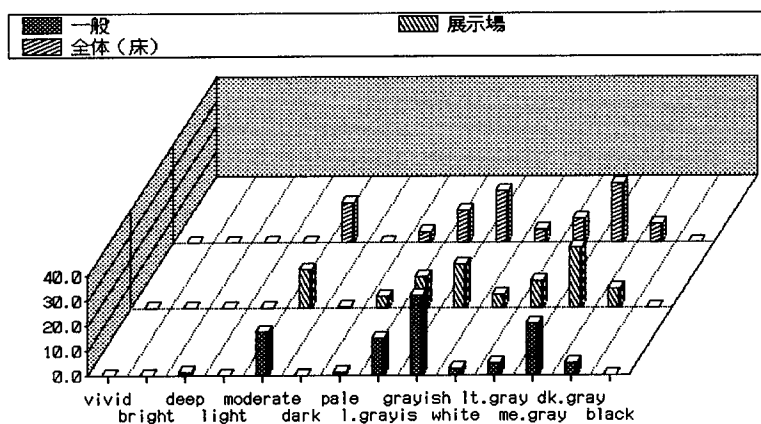


図-16 用途別にみるトーンの配色パターン (%)

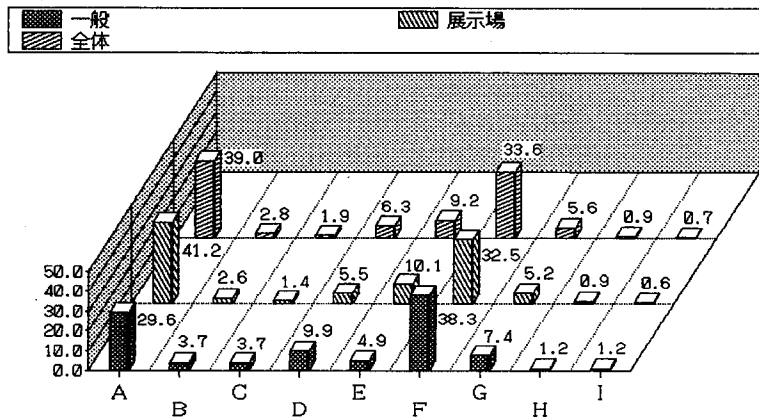


図-17 用途別にみる彩度差の配色パターン (%)

11) 用途別（一般・展示場）にみる特性

調査したサンプルを一般住宅（81室）と展示場住宅（345室）にわけると、図-15のように床の彩度の出現、図-16のような床のトーンの出現、図-17のような彩度差による配色パターンの出現など床の彩度の関係による違いが多少みられる。一般住宅の床は展示場住宅に比べやや高い彩度を使用しており、やや有彩色よりであるといえる。反面、展示場住宅は無彩色化の傾向といえる。その他には大きな差はみられない。

4. ま と め

住宅の色彩についてはこれまでの研究結果と同様の部分が多いもののやや近年に変化してきているものがある。特に、色相圏では主要なものとして白圏、グレイ圏、ブラウン圏、黄色圏があげられるが、床ではグレイ圏が増加し、ブラウン圏、黄色圏が減少している。壁・天井では白圏、グレイ圏が増加し、黄色圏が減少してきており、全体的にニュートラル化の傾向がみられる。また、トーンでみると、床ではgrayish、light grayish、moderateが多いものの全体的に減少してgrayが最も多くなった。壁・天井ではpaleが大幅に減少し、whiteと入れ替わり、無彩色化の傾向にあるといえる。

インテリアのカラーコーディネーションとしてみると、明度差による配色パターンは壁・天井が8程度の同じ明度で、床が壁・天井よりも3程度低い明度で配色するケースが最も多く、落ちついた雰囲気（安定感）や開放感を確保するためのものとして多用されていると思われる。彩度差による配色パターンでは床・壁・天井の彩度に差がない配色と壁・天井が同一彩度で床がそれより2.5

程度高い彩度の配色で2分されている。壁・天井の彩度は両者とも1程度が多く、床は同じ彩度かやや有彩色よりの彩度が多用されているといえる。色相圏およびトーンでは壁・天井を同一にするケースが最も多く用いられている。これは内装材の仕上げが壁・天井を同一にするケースが多いことに起因するものとみられる。

その他の特性をまとめると、空間別にみた場合では和室と他の空間との違いが顕著にみられる他、似た傾向にある空間として居間・台所・子供室のグループと浴室・洗面室・便所のグループと残りの空間のグループに分けられる。地域別にみた場合では際だった特徴がみられないものの、大阪、岡山がやや色相、彩度のニュートラル化が進んでいるとみられる。配色設計者別ではサンプル数が少ないものもあるため具体的な違いを示すまで至らないが、施主が床の彩度およびトーンの使い方にばらつきが多く、また、工務店とハウスメーカーの営業が他と違う傾向を示している。用途別にみた場合では住宅展示場のほうがより無彩色化しているといえる。

以上、住宅のインテリアにおける色彩とそのコーディネートの実態と特徴をまとめたが、サンプリングの地域的ばらつきや、比較検証にややサンプル数の少ない部分があり具体的な考察を避けたものもあるなどやや問題を残す部分がある。しかし、この報告により、住宅のインテリアカラーコーディネートの実態と特徴がある程度把握できたものと考ええる。

最後に、本研究で行った実態調査には本学デザイン科の平成3年度卒業生、齊藤優美子、白川文子、渡邊典子の諸氏に協力して戴いた。ここに記して感謝します。

参考文献

- 1) 牧田和久：住宅展示場のカラーコーディネートについて、日本インテリア学会、研究発表梗概集、1989.11
- 2) 牧田和久：住宅展示場におけるインテリアカラーコーディネートの実態調査、会津短期大学研究年報、第48号、1991.3
- 3) 牧田和久：住宅のカラーコーディネートについて、日本インテリア学会、研究発表梗概集、1991.11
- 4) 日本色彩研究所編：調査用カラーコード、日本色研事業、1971
- 5) 日本色彩研究所編：建築デザイン色票、日本色研事業、1973.7
- 6) 乾 正雄：建築の色彩設計、鹿島出版会、1976.11
- 7) 川上元朗ほか：色彩の事典、朝倉書店、1988.11

